

ジノメル『貨幣の哲学』[1890=1999] Philosophie des Geldes 居安正訳、白水社

分析篇 第一章 価値と貨幣

■ 「価値」とは何か

・「主体と客体との素朴・実践的な統一を分裂させ、両者を…はじめて意識させるこの緊張は、欲求するという単純な事実によってさしあたりは作りだされる。われわれがまだ所有もせずまた享樂もしないものを欲求することによって、その内容がわれわれと対立する。」(23-24)

・「欲求の可能性は、欲求の対象の可能性でもある。こうした成立した客体は、主体からの距離によって主体の欲求が設定するとともに克服しようとする距離によって特徴づけられ、この客体をわれわれは価値と呼ぶ。享樂そのものの瞬間は、そこでは主体と客体とが対立するから、いわば価値を消費する。価値は主体からの分離において初めて対立者として、客体として成立する。平凡な経験であるが、われわれが多く所有物を初めて正しく価値として評価するのは、われわれがそれらを失ったときであるということ、欲求された事物のたんなる拒絶が、享樂が達せられればほとんど生じない価値をしばしば事物に与えるということ、われわれの享樂の対象からの距離…が、それらの対象を輝かしい光と高められた魅力とのなかに示すということ、——これらのすべては基礎的な事実、すなわち価値は享樂瞬間の破壊されない統一においては生じることなく、その内容が客体として主体から分離され、いまやはじめて欲求されたもの、それを獲得するには距離と妨害と困難の克服が必要なものとして主体に対立することによるという事実の派生と変容の混合形式である。…このように事物は価値があるからそれを獲得することが困難なのではなく、それを獲得しようとするわれわれの欲求に妨害を対置する事物をわれわれは価値をもつと呼ぶ。」(24-25)

■ 「価値」と「自我」の同時形成

・「男性が個人的な選択なしに任意のどの女性にも満足するとき、人がたんに咬んで消化できさえすればなんでも食べるばあい、人がいかなる寝床においても眠るとき、人の文化要求が自然によってただちに与えられごく単純な素材によって満足させられるとき」＝「原始人の素朴な投射欲」(28)。この状態から、意識は「主体の洗練化」を図るようになる。

→

(1) 対象の限定化。

(2) 行為の「出発点」にある衝動の盲目的なエネルギーではなく、行為の「到達点」にある価値によって、導かれること。

→「われわれがまったく特別の客体を欲求するということは、われわれがそもそも客体を欲求するという事実をより鋭い意識に高める。しかしこの意識はいわばより理論的な意識であり、これはたんに自己の消滅へと突き進む衝動の盲目的なエネルギーを引き下げる。欲求の分化的な尖鋭化は欲求の基本的な強制手段の弱化と手を携えて進行する…」(29-30)

・「激情の鎮静と、存在と意義とにおける客観的なものそのものの表象とは、同一の根本過程の二つの側面にすぎない。」(30)

・「人格がなおあますところなく瞬間の情動に身を捧げ、まったくそれによってみたまれ受け入れられるかぎり、自我はまだ形成されることはできない。むしろ自我の意識はその個々の興奮の彼方にたち、どの興奮も全人間をもはや熱狂させないばあい、初めてこれらの興奮のあらゆる変化のなかでの持続的なものとして現れることができる。」(31)

・「客体の価値はなるほどそれが欲求されることにもとづくが、しかしその絶対的な衝動性を失った欲求にである」(31)。

■ 「美的価値」の成立

・「…美の喜びの個々の事例が、現在もなおいかに多く直接に感性的な享楽を提示しようとも、その独特なものはそれでもまさに、事象がたんにわれわれに引き起こす感性的あるいは超感性的な興奮の状態ではなく、事象を評価し享楽する意識のなかにもとづくからである。教養ある人であればだれも、女性美への美的な喜びと感性的な喜びとのあいだを原理的に明確に区別するであろう。」(33)

・「ここから明らかとなるのは、美的な判断を合理的に基礎づけることの頻繁な不可能性と、美的な判断が往々にして個人としてのわれわれに有用もしくは快適であるものとまさに対立するということである。ところで事物の性質と意義とは、それがたんに有用であるときとはまったく異なった仕方、主体の気分と欲望からは独立している。」「すなわち価値の客観化が成立するのは、客体の評価の主観的・直接的な起源と客体についてのわれわれの瞬間的な感覚とのあいだに形成される距離の関係においてである。」(35)

・(1)時間的な距離化、(2)客体の希少性、(3)獲得の困難性、(4)断念の必要性。→「価値の成立」と「獲得のための闘争と辛苦の要求」は同時に起こる。(35-36)

■ 経済的交換の成立

・「野生の果実は勞せず摘みとられ、交換されないで享楽されるから経済的な財ではない。」(53-54)

・「経済的な交換という事実は、事物を主体のたんなる主観性への融合からとき離し、主体がその経済的な機能を事物そのものに投入することによって、事物を相互に規定させよう。実際に有効な価値を対象に与えるのは、対象が欲求されていることだけでなく、他の対象も欲求されていることである。」(41)

・「主体の欲求と感情とがたしかに原動力としてこれらすべての背後にあるが、しかし原動力そのものからはこの価値形式は生じることができず、それはむしろ客体相互の秤量のみにふさわしい。経済は評価の流れを交換の形式によって導き、人間世界のすべての運動の源泉である欲求とその運動が流れ込む享楽の満足とのあいだにいわば中間領域を作りだす。」(42)

■ 交換から価値へ（犠牲による価値の形成）

・「…人間相互の多くの関係は交換とみなすことができる」(44)

・「われわれは愛を捧げることによって、——外的な活動結果を度外視すれば——いかなる効用も犠牲にはしない。われわれが対話において精神的な内容を伝えても、だからといってこの内容が減りはしない。」「これに対して経済的な交換は、——それが実体と労働と実体に投入された労働力のいずれにかかわるにせよ——つねにまた他の有用な財の犠牲を意

味する。」(45)

・【「個人の心における犠牲と獲得との主観的過程」】：「価値と交換のあいだの深い関連は、価値によってたんに交換を制約させているのみではなく、交換によってまた価値をも制約させもしており、このことをすでに示しているのは、両者が実践的な生活を基礎づける範囲の同等性である。…行為そのものは交換の図式にしたがって行われ、最低の欲望満足から最高の知的および宗教的な財の獲得まで、価値を獲得するためにはつねに価値が投入されなければならない。」(47)

・「われわれの考察にとっては、多産的で真に啓発的なものは交換から価値への道である。…価値がわれわれには犠牲過程の成果として現れるということ、このことは無限の富を明らかにし、われわれの生活は、この根本形式のお蔭でこの富を手に入れる。犠牲のできるかぎりの縮小化への努力とこれの痛切な感覚とは、犠牲の完全な廃止にして初めて生活を最高の価値にまで高めるであろうということを、われわれに信じさせる。しかしそのさいわれわれが見のがすのは、犠牲が必ずしも外的な障害であるとはかぎらず、むしろ目標そのものの内的な条件とそれへの道であるということである。…われわれが忘れるのは、目標がそのような克服されるべき妨害なしにわれわれにあたえられれば、それはもはや右とまったく同じ目標ではけっしてないであろうということである。」(48)

・「[犠牲は]たんに個々の価値の条件であるのみならず、ここでわれわれに関係する経済的なものの内部においては価値一般の条件でもある。すでに確定した個々の価値に対して支払われるべき代償であるのみではなく、それによってのみ価値を得ることのできる代償でもある。」(48-49)

・【「価値の内的矛盾」】：「…獲得物の価値はいわば出来上がってもたらされるのではなく、欲求された客体に部分的にかあるいはさらに全体的に、その代わりに必要な犠牲の程度によってはじめて成長する…。」「それらがわれわれに事物のための価値の犠牲をもたらすとき、その事物はわれわれにはそのものとしては無価値である。」「主体が他の価値の代わりに提供する価値は事実上は、この主体自身にとってその瞬間の実際的な状況のもとでは、彼が交換で手に入れるものよりも決して大きくはありえない。」(51)

・価値が生じてくる「この過程に現れるのは先ずは力の実証と困難の克服との喜びであり、さらにしばしば矛盾の喜びでもある。一定の事物の獲得に必要な迂路(うろ)はしばしば、それらの事物を価値と感ずる機会であり、しかしまたそう感ずる原因でもある。…男女間の関係において気づくのは、遠慮と無関心と拒否とが、これらの障害を克服しようとする熱烈な願望を燃え上がらせ、われわれを労苦と犠牲へと誘い、これらの抵抗がなければ目標もたしかに労苦と犠牲にはしばしばふさわしくないとされる。多くの人々にとって偉大なアルプス登攀(とうはん)の美的な収穫も、それが異常な労苦と危険との犠牲を要求し、それによってはじめて強調と魅力と聖別とを得なければ、もはや注目される価値もないであろう。」(52)

・「人間のいかなる業績が最高の名誉と評価とを受けるかを見れば、それはつねに全存在の没頭と努力と持続的な集中の最大——それゆえにそれとともにまた二次的なすべてのものの断念と犠牲行為、主観的なものの客観的な理念への献身の最大——を現しているか、少なくとも現しているように思われる業績である。」(53)

■ 関係性による価値の説明

・「…経済的な価値概念を孤立した実体性の性格から関係の生きいきした過程へ移すことは、人が価値の構成要素とみなすのをつねとする契機、すなわち有用性と希少性にもとづいてさらに解明される。」(56-57)「経済価値を需要と供給とによって決定させようとするれば、需要は有用性に、供給は希少性契機に対応する。」(57)

・【欲求作用と、被欲求性の相互比較】:「すなわち第一にはすでにみたように欲求作用そのものが、主体と客体とのあいだに障害、困難、犠牲が介入しなければ、意識された規定とはならない。われわれがまず現実に欲求するのは、対象の享樂が中間審において測定されるばあい、少なくとも忍耐の代償、他の努力やあるいは享樂の放棄が対象をわれわれから距離あるところに押しやり、この距離の克服意欲が対象の欲求である場合である。ところで第二に対象の被欲求性にもとづいて生じるその経済的価値は、すでに欲求作用のなかにある相対性の上昇あるいは昇華とみなすことができる。それというのも欲求された対象が実際的な価値、すなわち経済の運動に入り込んでいる価値となるのはたんに、その被欲求性が他の対象の被欲求性と比較され、それによって一般に定量を獲得することによってであるからである。」(58)→「欲求の比較、すなわち欲求の客体の交換可能性にしてはじめて客体のそれを、それらの高さによって規定された価値として、それゆえに経済的な価値として確定する。」(58)

・「それゆえ決定的なことはこうである。すなわち実際に有効な経済的な価値は決して価値一般ではなく、その本質と概念よりして一定の価値量であること、この量は一般に二つの欲求強度の相互の測定によってのみ成立できること、この測定が経済の内部において行なわれる形式は犠牲と獲得との交換の形式であるということ、したがって経済的な対象は表面的に思われるようには、その被欲求性において絶対的な価値要素をもつのではなく、この被欲求性がもつばら——現実的あるいは仮定的な——交換の基礎もしくは素材としてのみ対象に価値を得させるということである。」(59)

■ 価値という現象：均衡感覚

・【問題】:「いったい何がわれわれを動かして、事物のたんに主観的な享樂をこえてそれらに価値と呼ばれる独特な重要性を与えさせるか。事物の希少性はそれだけではこれに成功できない。」(60)

・「当事者が法と正義にしたがって相手と取り引きし、等価物を交換したと確信すれば、これはAにとってはこう表現される。すなわち彼はなるほど客観的にはBに等しいものに対して等しいものを提供し、価格(α)は対象(β)にとっての等価物であるが、しかし主観的には β の価値はたしかに彼にとっては α のそれよりも大きい。」(61)→こうした「価値同等性」の理解は、子供などの心理状態においては、育っていない。

・「価値と価格との客観性で正当な等価性は、われわれが事実的で個別的な等価性の規範とするものであるが、それもまったく一定の歴史的で技術的な諸条件のもとにおいてのみ妥当し、諸条件の変化によってただちに崩壊する」(63)

・「これらの価値表象はとにかく発達した状態にあっては二つの層をなして重なりあい、一方は社会圏の伝統や経験の多数や純粹に論理的と思われる要求から形成され、他方は個人的な状況や瞬間の要求や偶然の周囲からの強制から形成される。後者の層の内部の急速な変化にくらべると、前者の層のゆるやかな進化と後者の昇華によるその形成とはわれわれの知覚には隠され、そしてこれらは実際に正当とされたものとして、客観的な比例の表現

として現れる。」(63)→「この価値感情があの一般的な確定において測定されて相違を生じるばあい、人びとは価値と価格との分離について語る。」(63)

■ 代替の可能性と不可能性

- ・貨幣は、代替可能な価値の最高の発展形態。(100)
- ・「われわれの所有する大部分のものには、少なくとももっとも広い意味では代償が存在し、したがってわれわれがひとつのものを失ってもその代りに他のものを獲得すれば、われわれの生存の総価値はそのまま変わらずに続く。すなわち幸福主義的な総量はきわめてさまざまな要素によって同じ高さに維持される。とはいえこの交換可能性は一定の事物には機能せず、しかも…他のいかなる所有もわれわれには同じ高さの幸福量を与えることができないためばかりではなく、さらに価値感情がまさにこの個性的な形態に結びつくが、しかし他の形態と共通である幸福感情とは結びつかないからである。」「われわれが個性的なものを十分にしばしば評価するのは、われわれがまさにこれをこそ欲し、われわれがおそらくはわれわれにとって同じかあるいはより高い量の幸福価値を認める他のものを欲しないからである。」(100)
- ・「交換可能性そのものの担い手と表現とである貨幣は、われわれの実践的な世界のもっとも非個性的な構成物である。事物が貨幣と交換されるかぎり、…事物はこの非個性性に関与し、人々が事物におけるあの特殊な価値の欠如をもっとも明瞭に表現できるのは、人々が価値の場所を価値の貨幣等価によって隙間（すきま）を感じないように満たす場合である。」(101)
- ・「貨幣で買えそして貨幣によって代替できるものでさえ、より正確な検討によればそれでもしばしば、他のいかなる所有物によっても完全には代替できない価値ニュアンスをそなえた事物性質をもつ。われわれの実践的な世界の限界をはじめ特徴づけるのはこれらの規定の一方が無限に小さい次の二つの現象である。すなわち一方では数的にきわめて小さい価値と他方では貨幣——事物から抽象されたその交換可能性——とによってであり、われわれの自我の個性的な完全性における維持はこのきわめて小さい価値に依存し、それゆえそこでは交換可能性は問題とはなら」ない。(101)

■ 同等化の判断

- ・「商品の価値と貨幣額の価値とのあいだの同等化が意味するのは、けっして二つの単純な要素のあいだの等式ではなく、ひとつの比例である。すなわち一定の経済圏の一方ではすべての商品の総額と他方ではすべての貨幣の総額…をそれぞれ分母とする二つの分子の相等性である。」(116)
- ・「…種類の異なった芸術作品のそれぞれがそれぞれの特有の理想に一定の関係をもたなければ、それらの完成は互いに比較できないし、それらの価値を段階の関連のなかに配列することもできないであろう。それぞれの芸術作品の課題や素材や様式から規範が成長し、これに対して芸術作品の現実が近いとか遠いという感知できる関係をもち、この関係は明らかに作品の最大の多種多様性にもかかわらず、同等あるいは比較可能なものであるということが出来る。そのような関係のこの可能な同等性によってはじめて、それだけではまったく無関係な個々の作品から、価値によって精確に接合された秩序である観念的に共属するもの、すなわち美的世界が成立する。そしてこのことはたんに芸術の宇宙にのみ拡が

るのではない。一般にわれわれの孤立した価値評価の素材から同等の、もしくは等級づけられた重要性の総体が生じるということ、不調和なものさえもたんに価値相互の統一的な秩序と内的な関係を要求されてこそ不調和と感じられるということ、——われわれの世界像のこの本質的な特徴をわれわれはいたるところでわれわれの能力、すなわちたんにそれぞれ二つの事物のみではなく、それぞれ二つの事物のそれぞれ他の二つの事物にたいする相互の関係を比較考量し、これを同等性判断もしくは類似性判断において総括する能力に負う。貨幣は、われわれの内奥（ないおう）のこの基本的な能力あるいは形式の産物として、この能力のもっともはるかな例であるのみでなく、いわばまさにこの能力の純粋な具体化にほかならない。」(129-130)

・「…貨幣がその意義を示すのは、まさにこれらの他の諸客体の相互の価値関係を表現することにあり、貨幣がこのことをうまくやれるのは発達した精神のあの能力、すなわち諸事物そのものが同等性や類似性をもたないばあいも、諸事物の関係を等置する能力の助けによる。」(130)

総合篇 第四章 個人的な自由

■ 貨幣経済の発展による自由の獲得

・【自由の階梯】：(1) 奴隷の場合。(2) 一定の労働時間と体力との代わりに、一定の労働生産物が要求される場合。(3) 貨幣で支払ってもよい場合。(302-303)

→「ここで問題となるのは、一定の所与の客体の所有変更にとって、それを双方に有利とする形式をみいだすことである。」(309)→奪い合いの競争という人間の悲劇を減少させることが必要。

・【文化的価値の増大】：「ますます多くの生内容が超個人的な形態へ客観化されるということが、文化過程による本来の教化なのである。すなわち書物や芸術、祖国や一般文化といった観念的な形象、概念のおよび美的な表象への生の形成、種々雑多な興味あるものや重要なものについての知識——これらすべてが、一方が他方から取り去ることなく享楽されることができる。価値がそのような客観的な形式により多く移行すればするほど、あたかも神の家と同じように、そこにはあらゆる心のためのより多くの場所がある。生活内容のこの増大する客観化が、〈私がそこに行けるように退いてくれ〉といった自己利益のための他者の排除のすべてとかかわることなく競争と併存するのでなければ、おそらくは現代の荒涼たる激烈な競争は決して耐えられないであろう。」(310)

・「もっとも高貴にしてもっとも洗練された出来事を達成させ、闘争と相互の駆逐なしに獲得できる世界の構造」→「この解決に接近するのが機能的な形式における交換である。単純な奪取やあるいは贈与には純粋に主観的な衝動が生きているが、この奪取や贈与にたいして交換はすでに見たように客観的な評価と熟慮、相互の承認と直接に主観的な欲望の慎みとを前提とする。」「とりわけ人間的なことは、…力の相等性は相互の掠奪や闘争へではなく釣り合いのとれた交換へと導き、そこでは一方的で個人的な所有と所有欲とが、主体の相互作用から発しながら、しかもこの相互作用をこえて高まる客観的な総体的行為へと入り込むことである。」(310)

■ 人格としての自由

・【非人格的な依存関係の増大としての自由】：「貨幣経済はこれまでに述べたようにたんに相互依存の解消のみではなく、特殊な種類の相互依存を可能とし、この依存が、同時的な最大の自由之余地を与える。」「複雑化した技術のために人間の行為と存在とが客観的な諸条件にますます依存するにつれて、それだけ人間の存在と行為もまた必然的にますます多くの人々に依存しなければならない。とはいえこれらの人々はおそらくあの機能の担い手、つまりはある資本の所有者、あの労働条件の媒介者として、主体にとっての意義を獲得する。彼らがそのほかに人格として何であるかは、この点についてはまったく問題とはならない。」(315)

・「個性の発展、個々のすべての意志と感情とによってわれわれの自我の中核を発達させるという確信、これが自由であるとみなされるべきであるとすれば、自由はたんなる関係の欠如としてではなく、まさに他者に対するまったく特定の関係として、このカテゴリーのもとに入る。」(319)

・「われわれが自由と名づけるものは人格の原理ときわめて密接に関連し、ために道徳哲学は十分にしばしばこの両概念を同一であると宣言した。心的な諸要素のあの統一、それらの諸要素のいわば一点におけるあの集合状態、われわれがまさに人格と呼ぶ存在のあの強固な輪郭と代替不可能性——なんとしてもこれらが意味するのは、あらゆる外的なものにたいする独立と封鎖とであり、もっぱら自己の本質の法則にしたがう発展であって、これをわれわれは自由と呼ぶ。」(323)

・「経済が発展して完全に拡張し、複雑化し、内的に相互作用しあうようになることによって、人間相互のあの依存がはじめて成立する。この依存は個人的な要素を排除することによって、関係の完全な欠如ができるよりも個人をより強く自己に頼らせ、自由を積極的に意識させる。貨幣はそのような関係の絶対にふさわしい担い手である。それというのも貨幣は、なるほど人間のあいだに関係をつくり出しはするが、しかし人間を関係の外部に放置するからである。」(324)

・貨幣は、もう一つの自由、すなわち「一般的な潜勢力としての所有」を与える。

■ 利己主義と精神活動の同時発展

・【職業部門の発達】：「…また貨幣経済にしてはじめて、その生産性が内容的にはいっさいの経済的な運動のまったく彼方にある職業部門の発達を可能とした。——教師と文学者、芸術家と医師、学者と政府官僚といった、とくに精神的な活動の職業部門である。現物経済が支配するかぎり、これらの部門は一般にわずかな範囲にしか達するにすぎず、しかも大土地所有にのみもとづいていた。それゆえ中世においては教会と、そして多くの方向に向かって騎士階級とが精神的な生活を支えた。人間のここに示したカテゴリーは、彼らがたがいに求めあうかそれとも大義を求めるかという問題の厳格さによる等級を含み、彼らの人格の全価値はこの問題に依存していた。利得をもたらす活動が原理的にもっぱら利得そのものに動機をおかなければならないばあい、この標識は完全に廃止され、せいぜい傍若無人の利己主義と真面目な心情…とのあいだの二者択一にとって代わられる。独特なことはこうである。すなわち貨幣は、もっとも昇華された経済的価値であるにせよ、あるいはむしろそうであるがゆえに、事物の経済的な側面からわれわれをもっとも完全に解放す

ることができる」。(334)

・【**分化独立発展としての自由**】:「人間の不自由は、彼が外的な力に依存しているということによって、まずはまったく表面的に特徴づけられる。この外的な依存はその対象を次の内的な関係に見出す。すなわち心の関心あるいは行為が他の心ときわめて緊密に組み合わせられ、したがってそれらの独立した運動と発展とが妨げられるという関係にである。外部への不自由はきわめてしばしば内的なものへ継承する。それは心的な領域あるいはエネルギーに圧倒的に強調をあたえ、このエネルギーが他のエネルギーの発展のなかにいわば融合し、自己自身への自由な帰属を妨げる。…道徳哲学が道徳的な自由を感性的・利己的な衝動からの理性の独立と定義するのをつねとすれば、このことは自由というまったく普遍的な理想のたんなる一面的なばあいであるにすぎず、この普遍的な理想は、他のあらゆるものにたいする心のエネルギーの分離した発展、つまりは独立した全力投入において成り立つ。感性がまた『自由』であるのは、それが理性の規定とは結びつかず、それゆえもはや理性によって拘束されないばあいであり、思考作用が自由であるのは、それがたんにその固有の内的な動機にのみしたが、固有でない道へそれを引き込もうとする感情と意欲との結びつきから解放された場合である。このようにこの意味における自由は内的な分業として、衝動と関心と能力との相互の解放と分化として定義づけることができる。人間というものが全体として自由なのは、人間の内部においてそれぞれ個々のエネルギーがもつばそれぞれ固有の目的と規定とにしたがって発展し生きつくすばあいである。」

(336)

・「人間は多数の性質と能力と衝動から成り立っているから、自由が意味するのはそれらのそれぞれの自立であり、たんに固有の生法則にのみしたがう発展であるにすぎない。」「…人間は、結局は彼の存在と行為とのあらゆる多様性において、相対的な統一としてあらわれる。内的な系列の完全な分化あるいは自由は、実現不可能な概念である。この点における到達可能なものの定式は、錯綜と結合とが系列の個々の点とますます少なく関係するようになるということであろう。」(337)

■ 人格の拡張手段としての貨幣

・「所有物の獲得はいわば個人の限度を超えた人格の成長である」(349)

・「自由が意味するのは、意志が妨げられずに実現されることであるとすれば、われわれはより多くを所有すればするほど、それだけいっそう自由であるように思われる。」(350)

・【**貨幣の完全な空虚性**】:「貨幣形象となった価値は、いまや主観的なエネルギーを無条件に引き渡すために、価値の固有の土台と実体とにたいして独立化した。ここでは賭けそのものが賭けの対象を自己の運命において、しかも現存する実質的な基礎から独立して規定することができるから、価値の貨幣形式の浸透性と可塑性とはもっとも狭義の主観性によって、そこにもっとも勝ち誇った表現を見いだした。」(353)

・「…貨幣は人格のまったく独特な拡張を可能とし、人格は事物の所有によって身を装うとはせず、事物に対する支配は彼にはどうでもよい。むしろ彼には事物に対するある一時的な力で十分なのである。そして事物に対するいっさいの質的な関係からのこの遠隔化は、人格にいかなる拡張も満足も与えることができないように思われるが、しかし事物は貨幣に向かっていわば絶対的に従順であるから、まさに購入の行為がそのような拡張と満足として感じられる。」(354)

→「このたんなる象徴の享樂」は、「自分では何も享樂せず、つねにたんにすべてのために支払う」ことになる。「倒錯した満足」となる。事物の積極的な使用から遠ざかって、貨幣消費のたんなる機能が、人格を拡張する。

・「たんなる貨幣所有そのものの喜びは、あらゆる感性的な直接性からもっともへだたった喜びの、思考作用と空想との過程によってきわめて排他的に媒介されたもっとも抽象的な喜びのひとつである。」(357)

・【吝嗇としての人格】:「吝嗇漢(りんしょくかん)は貨幣の所有に悦樂を見だし、個々の対象の獲得と享樂までは進むことなく、このことによって彼の勢力感情は、一定の性質をもつ事物に対するあらゆる支配よりも、彼にとってはより深くより価値にみちるにちがいない。」(354-355)

・「貨幣の所有は、他のあらゆる所有のこのひそかな反抗からの自由である。事物そのものには近づかないことと、個別的なものと結びついた特別な喜びをすべて断念することを代償として、貨幣は支配感情を与えることができる。」(355)

・「吝嗇漢の喜びは美的な喜びに似ているにちがいない。それというのも美的な喜びもまた、世界の測りがたい実在の彼方に位置し、精神が残りなく入り込めるほど精神には完全に浸透できる世界の外観と輝きに固執するからである。」(355)

・【可能性の余地としての自由】:「…美的な情調が感じる満足の感情は、事物の息苦しい圧迫からの解放であり、普通であれば抑圧的となるはずの実在性をもった事物への、自我のあらゆる喜びと自由とをともなった拡張である。これこそは、たんなる貨幣所有についての喜びの心理学的な色彩であるにちがいない。貨幣所有の意味する事物所有の独特の濃縮化と抽象と予想は、意識にたいしてまさに、あの自由な活動の余地、無抵抗な媒体をつらぬく予感にみちたあの自己拡張、現実による圧迫と否認とを欠いたあらゆる可能性の自己へのあの吸収——これはすべて美的な享樂に固有である——を許す。」(356)

■ 仕事に対する貨幣評価

・【時間賃金と出高賃金】:「時間賃金のばあいは全人間の確実には規定されない総体的な力によるのにたいし、出来高賃金にあっては個々の仕事が人間から完全に客観化して正確に限定され、この仕事に対して支払われる。にもかかわらず一時的には時間賃金が一般には労働者に有利である。…なぜならまさにここでは賃金払いは出来高賃金の場合と同じ厳格さで、実行された仕事のみに従うわけにはいかないからである。…このように時間賃金はより人間にふさわしく思われる。なぜならそれは出来高賃金よりも大きな信頼を前提とし、全体としての人間が労働関係にはいり、したがって無慈悲な純粹に客観的な基準が緩和されるにもかかわらず、…それは労働の内部においては、いくらかより多くの実際の自由を与えるからである。」「このことがもっとも明らかとなるのは国家の高官の地位においてであり、彼の俸給はもはや個々の仕事にたいしてはいかなる量的な関係ももたず、それは彼にたんに身分にふさわしい生活水準を可能とすべきものとされる。」(369)

・「ここでは報酬がたんにまったく一般的にのみ生じ、経済的な発展の個々の変転と密着してはいないということは、実はまさに経済的に評価される仕事の個体からの全体としての人格の分離を意味する。そして安定した俸給とその個々の換価の変動する高さとの関係は、ちょうど全人格と彼の個々の仕事の不可避的に変動する質との関係と同じである。——この現象系列のもっとも極端な段階は、…職務と何らかの貨幣額との不通約性がいつさいの

『ふさわしい』支払いを幻想的とするような、あの理想的な職務の報酬にある。」「ところがより低い領域[の仕事]にあっては、支払の有無と量とは、はるかに直接にまた正確に仕事の結果に依存する。」(370)

・「…人は高い領域へ上がれば上がるほど、ますます貨幣等価物がそれらの質のあいだの正確な関係を論理的に指示するとは主張しなくなろう。結局のところ仕事への支払い額の完全な無関係性がおそらくもっとも鋭くあらわれるのは、音楽の巨匠の演奏が、われわれのなかで発展することのできる感情の最高の段階へとわれわれを高めてくれるにもかかわらず、それに対して僅かな金額しか支払わないばかりである。このような等価物が意味をもつのは、それが価値からすれば個々の仕事とはけっして一致せず、むしろたんに芸術家の生計に寄与し、この生計が彼の仕事にふさわしい基礎をなすはずであるとする立場からのみである。それゆえまさに最高の創作のばあいに発展はゆがむように思われる。すなわち貨幣等価物はもはや個々の仕事に、その背後にある人格とかかわりなく妥当するのではなく、むしろまさに全体としてのこの人格に、個々の仕事とはかかわりなく妥当する。」(370-371)「…このことが示すのは、官僚あるいは芸術家が彼の個々の業績のために報酬をあたえられるのではなく、彼に一定の個人的な生活水準を可能にすることが彼らの報酬の意味であるということである。」(371)